

＜県研究主題＞

「学習指導要領」の内容を踏まえた教育課程の編成と教育活動の工夫・改善

提案 1

提案者 九嶋 広志（大和地区）

＜研究主題＞

深く考え、自ら学び、課題を解決しようとする生徒の育成
— 各教科における読書活動の取組を通して —

1 提案内容

学校の現状を踏まえた各教科における読書活動推進の手立てと成果

(1) 研究の概要

「自ら問題を発見し、よりよく解決しようとする探究心と実践力を持つ生徒」の具現化に向けて、生徒の思考力判断力表現力等の育成と各教科における読書活動を推進する。

(2) 研究テーマの設定の理由

大和市の読書活動の推進等の施策を受けて、学校では環境整備に取り組んできたが、学校図書館の利用率は上がってはいるものの、一部の生徒の利用が目立っていた。

(3) 学習指導要領・神奈川県中学校教育課程研究会の研究主題との関連

学校図書館の利用の趣旨にそった取組である。また、言語活動の充実による読書活動の推進。学習指導要領の特色を踏まえた実践である。

(4) 研究内容

市内中学校では朝読書の取組がみられたが、独自の読書活動全体構造図を作成し、学年での読書時間の確保を行った。読書に対する意欲向上のための工夫と全教科での取組の在り方についての研究を行った。

(5) 各教科における読書活動

読み聞かせや、図書を使ったワークシートの作成をした。数学では鶴亀算等を紹介し、生徒が興味関心を持てるよう工夫した。社会科では歴史のとらえ方、修学旅行とからめた図書を紹介し、事前学習に役立てた。

(6) 研究の成果

理科と道徳では時間の確保ができなかったが、各教科で読書活動が行われ教科会での情報交換や授業改善が行われた。生徒の感想からは、社会的事象に関心を持ち、理解が深まり、思考力、判断力、表現力等に変化が見られた。

読書活動のアンケートから、「読書は好き」「読書の時間」「図書室、地域の図書館の利用」等の経年変化では数値の向上が見られた。

(7) 今後の課題

学習支援部としての機能が十分に発揮できず、教科によっては、明確な目標を立てることができなかった。また、図書館には司書が配置され、使いやすい配置になっているが、蔵書数の不足や、図書室を使用する学級の調整が困難である。

生徒の様子を見てみると、本来の「読書」と言えるものでないものもある。また、評価が明確にできず、生徒の変容を確かめることが難しいと感じる教員も見られる。

今年度から朝読書を導入し、読書活動の全体構造図も改めた。図書委員会では学級文庫の管

理を行っている。成果と言うより課題が多く見付き、次へのステップを見いだすことができた。

2 協議内容

(1) 言語活動の充実と評価について

◇読書活動という枠組みを設けなくても言語活動の充実を図ることができるが、今回の取組は子どもの思考力、判断力、表現力を伸ばすことが目標だった。

◇それぞれの教科の中で、言語活動の充実につながっているかどうかということが読書活動の評価のポイントとしてとらえた。

◇活字に触れさせることから始めることも大切である。

◇教科での読書活動をすることによって、教科の取組の課題が見えてきたことも成果の一つといえる。

(2) 朝読書について

◇朝読書の利点は、落ち着いた一日のスタートができることである。

◇朝読書をする、昼食時間が遅くなるため、昼読書や帰り読書も検討したが、現段階では大和市では全ての中学校で朝読書を行っている。

◇朝読書をして、午前中3時間、午後3時間で時間割を組むと、昼食時間が遅くなることはない。

◇読書活動というと狭いイメージがあったが、今回の発表は読書活動というより言語活動だったと感じた。理科では実験があり、読書に充てる時間的余裕はないかもしれないが、言語活動と広いイメージで取組むとよいと考える。読書活動というより言語活動の一部としてとらえた方がよかったのではないか。

◇朝読書は教育課程外の時間として設定している。

3 まとめ（永井校長）

学習指導要領総則の「学校図書館の利活用」に「読書活動は学校教育活動全体を通じ、多様な指導の展開を図ることが大切である」とある。つきみ野中では、各教科での実践であり、画期的だったと感じる。学校の現状を分析し、年間計画の中に位置づけ、学級文庫の充実も図り、1年間で成果が現れた。

1、2年生は朝学習として国語のモジュールとして読書活動、3年では社会のモジュールとして新聞を読ませている。感想を書かせたり、紹介文を書かせたりしている。授業時間の確保と放課後の時間の確保の両立を図った。朝読書は落ち着いた静かな環境で授業を始められる。多くの学校ではこのような考えで行っているのではないか。

読書活動の推進のためには、中学校の3年間を見通して計画的に進めていくことが大切で、読書活動のための段階的な指導が必要である。また、教科だけではなく、各領域との連携も必要となる。さらに、読書は学校だけでは不十分であり、家庭や地域と連携した読書活動の推進が望まれる。つきみ野中では今年度から朝読書を導入した。今後も授業の連携が図れるとよい。生徒の望ましい生活習慣をつくるため、教職員の共通理解のもと、学校教育の全般を通して行うことが大切である。

<研究主題>

学校の教育力を高め、確かな学力を育成するために
～学び合い・高め合う授業づくりから一人一人の生徒を大切にする学校づくりに～

1 提案内容

川崎市立西中原中学校は平成24年度に川崎市の授業力向上支援事業研究協力校の指定を受け、「『学び合い』の授業実践による授業力向上」を研究主題として取組を行った。

(1) はじめに

川崎市では、市教育委員会と小・中学校が連携し、今日的な教育課題に即した研究を行い、平成21年度からは「『生きる力』をはぐくむ学習指導の工夫・改善」をテーマにしている。「総則」では平成25年度のテーマを「『生きる力』の育成をめざした教育課程の創造」として研究・実践の成果を冊子（以下、冊子と略す）にまとめ、今年度の内容は

○ともに学び、高め合う授業づくり・学校体制づくりを目指して（学習指導要領の改訂において「言語活動の充実」が求められていることについての解説と授業づくり・学校体制づくりの取組についての解説）

○小学校・中学校におけるともに学び、高め合う授業づくり・学校体制づくり

以上からなり、各学校の事例を次の4つのポイントを視点に掲載をした。

- ・指導方法や指導体制の工夫・改善など個に応じた指導の充実
- ・生徒の言語環境を整備し言語活動の充実を図る
- ・教員と生徒の信頼関係及び生徒相互の好ましい人間関係を育てるとともに生徒理解を深め、生徒指導の充実を図る
- ・見通しを立てたり、振り返ったりする学習活動を重視し、計画的に取り入れる

(2) 取組の内容

本校は全校生徒数約1500人、職員数80人の大規模校である。「学び合い」による授業実践の取組、大規模校における職員研修、生徒の思考力・判断力・表現力の向上の3点を柱として、生徒の学力のボトムアップを図ること、「学び合い」を通して学級の間関係の改善を図ること、教師と生徒の人格のふれあいを基盤に、信頼関係を築くことを大切にしながら研究に取り組んできた。研究にあたっては、授業方法の見直し、授業研究会のもち方の工夫を行い、次の3点を授業研究の課題を捉え直す取組のポイントとした。

○生徒の発言や考えを大切にし、言語活動を充実させることで、学び合い・高め合う授業づくりをする

○教員が主体的に参加できる授業研究会の在り方を工夫し、共通する視点を持って授業を見合うことで、教師の授業力の向上を図ること

○これらの取組を通して生徒理解を深め、一人一人の生徒を大切にする学校づくりにつなげる学び合い・高め合う学習活動の場面として、研究のスタート時は一斉授業の中に1回15分のグループ活動を取り入れ、グループは男女混合4人で、男女は隣同士に座らせ、課題を設定し、生徒が主体的に考える授業展開を行い、3つの授業のポイントを確認した。

A：生徒がお互いに考えを聴き合うことを大切にする雰囲気をつくる

B：生徒一人一人の発言を生かし、一人の意見をクラス全体で共有することを大切にする

C：話し合うことで学びが深まる課題を考える

その後、研究を進める中で、授業の形式についての検討・協議を進め、グループ活動を行う時間については教科指導のねらいを考えて設定することにした。学び合い・高め合う学習を軸にした授業では、教員がいかに生徒一人一人の考えや発言を生かし、それに臨機応変に対応していくかがポイントとなり、言語活動の充実につながっていく。

2 協議内容（「校内研修の推進」を研究協議の柱として、質疑・協議を行った。）

Q 「学び合い」の授業場面を教員が映像を見て確認しているが、取り組みの経緯や理念の伝え方、継続していく上での工夫について聞きたい。

A 毎年の異動者が20人規模。「学び合い」の理念を共有するため、ベテランも含めて若手や異動してきた教員で自然発生的に自主研修を行い、また、授業の様子を伝えるために映像で確認している。各教科の授業研修では時間割を調整し、放課後に指導案検討の時間も確保している。その際、授業者の負担にならないよう全体でバックアップしながら行っている。

Q 校内研修会の持ち方と内容は。

A 年2～3回行っている。1・2年全クラスの授業公開と5校時に夜間学級も含めた全教員で研究授業を実施している。研究協議は10グループ程度に分かれて行っている。さらに、各教科ごとには、月1回の教科部会で「学び合い」の授業の実施を声かけして、互いに授業を日常的に見合っている。

Q 研究授業を1・2年で行う理由は何か。

A 3年は行事日程（6月に修学旅行と合唱コンクールがある）の関係で、時間的制約があり厳しく、実施していない。ただ、3年生は授業研究の3年目でもあり、「学び合い」の授業にはよく慣れている。

Q 川崎市の取組内容を参考にして今年度から年間20回の研究授業を実施している。研究授業は他クラスを下校させて行うので授業時数の確保等の大変な面もある。実施にあたっての良い方法を教えてほしい。

A 一年目は試行錯誤しながら実施した。技能教科では生徒がいつも話し合いをしていては授業が進まないこともあったが、授業の感想を話したり、グループで考えを出し合うなど互いに話し合いができるようになってきた。一方、授業を参観する教員の学年・教科が異なると授業の指導内容がわかりにくいこともあったが、研究を進めるうちに他学年や他教科の教員と情報交換をする機会が増えてきた。人の異動などもあるので、研究の継続にあたっては無理をしないことが大事であり、多くの意見を取り入れて進めることが大切と考えている。

Q 「学び合い」の授業において、「学び合い」の場面を記録して、統計を取っているのか。

A 統計は取っていないが、授業の内容や形態の記録は各教科に任されている。グループの形態では教科によっては必ずしも4人でないこともあれば、毎回4人組で行う教科もある。

Q 「学び合い」の授業とは、どのようなものであると語られているのか知りたい。また、教え合いや話し合いとはどう違うのか聞きたい。

A 試行しながら自分も「学び合い」の授業をやってきたが、普段の授業で意識していることとしては、互いに聞き合い、「わからない」ということを言える雰囲気や人間関係をつくりたい。さらには、自分の考えを表現できるようにさせたいと考えている。よって、言葉だけでなく、実践した授業の映像を見せて共有を図っている。

3 まとめ

- ・西中原中学校は大規模校ながら、授業中は大変落ち着いた様子の学校である。川崎市の冊子の編集で、学び合い・高め合う授業づくりの実践研究で関わってきた。

- ・「学び合い」の授業とはどういうことかと、昨年の冊子の編集時にも質問があった。「目線を低くする」「声かけのタイミング」「話が進まないグループへの関わり」「クラス全体的話し合い」など、教員が生徒の考えや発言を生かして対応し、仲間との学び合いや自分の考えを深めることで、言語活動の充実につながっていくと考える。
- ・これからの学びとしての課題は「生き抜いていく力」「活用に向かう力」「協力してい力」という『新たな学び』を实践できる力を持った生徒を育てることである。生徒自らの関心に基づいて問題に取り組み、主体的に関わる姿勢を持ち、互いに意識を高め合うような授業を行うためには、教員の力が変わっていく必要がある。校内研修で行われる研究協議のグループ協議では、司会を決めずに授業者自身が進行して、教員同士が互いに発信力やコーディネートする力を伸ばし、教員も「学び合う」ことを大切にしたい研究協議とした。
- ・授業力を高めていくことでは、始めは話し合いの場面が15分としていたことが、研究を進める中で15分という形にとらわれず変容していったことが重要である。これまでの授業研究会での課題から、教科や学年の壁を取り払い、授業を全体で見合い、全校で共有することができた。他地区でも教科の壁を取り払って行っているところはあるが、西中原中学校のように、
 - ① 生徒全体を見ることのできる位置で生徒の姿を見る
 - ② グループ活動の生徒の会話から、生徒の発言内容のつながりを聞き取る
 - ③ 課題に対する意欲や取り組みの様子を見る
 - ④ 授業の発展や行き詰まりなどで教員がどう子どもの学びに関わったか
 という共通する視点を持ち、授業を見る視点が、子どもの学びを見る視点へと変わっていったことがこの研究の中心である。
- ・最後に、全国学力学習状況調査の結果が公表されるが、結果を実践レベルで充実させていく段階に入ってきた。これまでの数年間で取り組んだ研究内容に、全国学力学習状況調査の結果という客観的データを取り込んで、研究の検証を行い、次へと進めて行ってほしい。

グループ協議（提案1、提案2から、「読書活動・校内研究の推進」を協議の柱としてグループ協議を行い、各グループで協議された内容をキーワードで示して報告した。）

1 グループ協議の報告

Aグループ 『子どもの動き』

「読書活動」の実践報告では理科の読書活動はなかったが、理科の実験中の話し合い活動は常にあり、話し合い活動は行われている。校内研究での視点として、教科の授業研究会では教科のねらいに沿った教科指導の内容が中心となるが、全教員でみるときは、活動場面での「子どもの動き」を共通の視点として見るのが大事であろう。

Bグループ 『視点』

「読書活動」の行われ方や本の利活用方法など参考になった。「校内研究の推進」では、研究協議で生徒のインタビューを取り入れている学校があり、生徒の視点から授業をふり返ることができる。研究授業には沢山の目で見ること、授業中の生徒の顔が見られる。授業を見る「視点」を明確にして、話し合いの場面が成立しているかどうかをよく見るのが重要である。

Cグループ 『共通理解』

「読書活動」「校内研究の推進」を進めるにあたっては共通理解が大事。各教科での「読書活動」の取り入れ方や「読書活動」を行ったときの内容や方法についての紹介をした。今年度から「朝読書」を取り入れた学校では、取り組みの重要性を挙げた。全体として何かを進める

ときにはパワーが必要であるが、新しいことを始めるのは楽しいことであると皆が感じている。

Dグループ 『関係性』

「校内研究の推進」については、生徒自身が「話し合い活動」を望んでいることもある。まずは道徳とのタイアップも含めて授業で始めて見るのが大事。授業づくりを大切にすることで、教員同士の会話も増え、生徒の様子も落ち着いた例もある。この研究のように、何かを続けていくことでは、始めるきっかけや理念をどう継続していくか、生徒にとっても教員にとっても大変であるけれども、互いの関係性を大切にしながら進めて行くことが重要であろう。

Eグループ 『授業研究の推進』

小規模校の授業研究では全体で「ねらい」の共通理解を図り、研究協議を行っている。研究協議で生徒インタビューを行っている学校では、教員の発問や互いの意見を聞き合う場面に対する生徒側の受け取り方を直接聞くことで、指導のねらいを検証する大きな判断材料になるよい面がある。さらに、他学年の代表生徒を参観させている学校もあり、研究協議で生徒同士が互いに意見を述べる例を挙げた。研究授業の実施だけでなく、日常の授業を教員同士が互いに見合うことの意識を高め、職員室で授業内容や生徒の様子を語り合う積み重ねも大事である。

Fグループ 『教師の気づき』

「読書活動」「校内研究の推進」について各校の様子を話した。「朝読書」を昼食時間や給食の配膳の時間に行う例もあり、実施時間帯の確保や実施した場合の放課後の活動時間の保障など、各校の工夫が紹介された。読書活動や話し合い活動が、学校文化として、学校全体で行うまでになるには、教員全体の共通理解が必要となる。研究の理念や話し合いの方法を継続していくためにも手本となる授業の見学や映像を見るとき教員の気づきが重要である。

2 まとめ

- ・「総則」については、平成20年の改訂当初はめざすところでの高いイメージが全体としてあったように感じるが、完全実施以降、特に今日の話し合いでは、教育課程の理念を土台とした発表内容や意見交換が行われていた。教育課程の編成と教育活動を工夫・改善していくことでは、原点に立ち返って考えたり、検討を重ねたりすることが大事である。その点では、本日の2本の提案では、学習指導要領の内容を踏まえた上で、県の研究主題にそったテーマを設定した研究・実践が行われ、成果と課題を示していただいた。
- ・九嶋先生の「読書活動」の発表では、読書活動を教科の授業に組み入れ、その後の実践から朝読書を実践するに至るなど興味深い内容であった。その中で、学習指導要領の趣旨を踏まえながら、なぜ本校の生徒に「読書活動」を行うのか、今後も研究の当初の原点に戻って考えていくことが大切である。
- ・齋藤先生の「校内研究の推進」については、当初のグループ活動を15分と設定して始めた結果、子どもの学びにとって何が必要か、大切なのかを研究を進める中で気づいたこと、共有したことが素晴らしい。15分という授業の型から進めていったことだが、投げかけがなければ進まない。型を提示した上で、型から脱却するためにはどうすればよいか、教員同士で十分に共通理解をもちながら進めていくことが大事である。
- ・以上の研究では、しっかりと学習指導要領に則って行われている。本日の部会を通して、各校に持ち帰るお土産が沢山できたのではないかと思う。